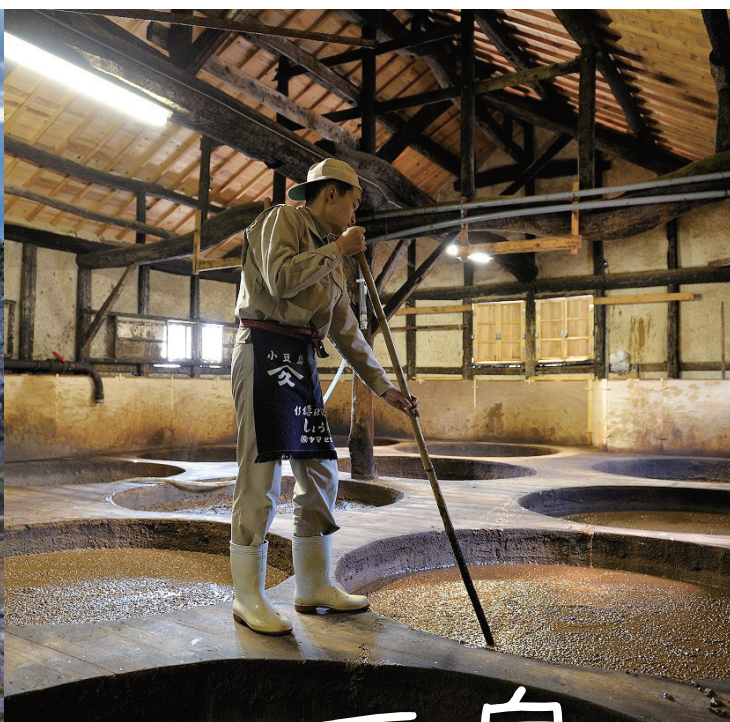


National
Parks
of Japan



瀬戸内海国立公園 地域ストーリー



大地と共に生きる



Setonaikai National Park



小豆島 Local story

1. 地質の多様性と3つの土砂災害が、土地利用の多様性をうみだした
2. 小豆島のおいしい食
3. もっと伝えたい、島の魅力

SHODOSHIMA



しほうざし
▲ 四方指

小豆島固有植物である
ショウドシマレンギョウやカンカ
他希少種もカクレキ岩エリ
多く生育。

大地から生まれた自然や文化、
知恵とそれらをつないできた人と海

大地から小豆島を探ってみる

備讃瀬戸と播磨灘の間にはさまれた香川県の小豆島は、
醤油やオリーブ、素麺^{そうめん}などの産業や

紅葉が有名な奇岩溪谷の寒霞溪、

また、農村歌舞伎や石工などの文化・歴史など、
多様で豊かな地域資源が詰まっています。

実は、それらには人や海、自然環境、大地が背景にあり、
そこから今につながっています。

(安山岩と火山砕屑岩)

(土庄層群)

かえるごいけ
蛙子池

なかやま
中山地区の棚田

▶ 地すべり跡の斜面

(花崗岩)

ひとやま
肥土山地区の水田

▶ 地すべりによるせきとめ湖跡

かぶき
農村歌舞伎

マサ土の扇状地

土石流の跡地の活用

オリーブ

▶ 栽培に適した地質や気候

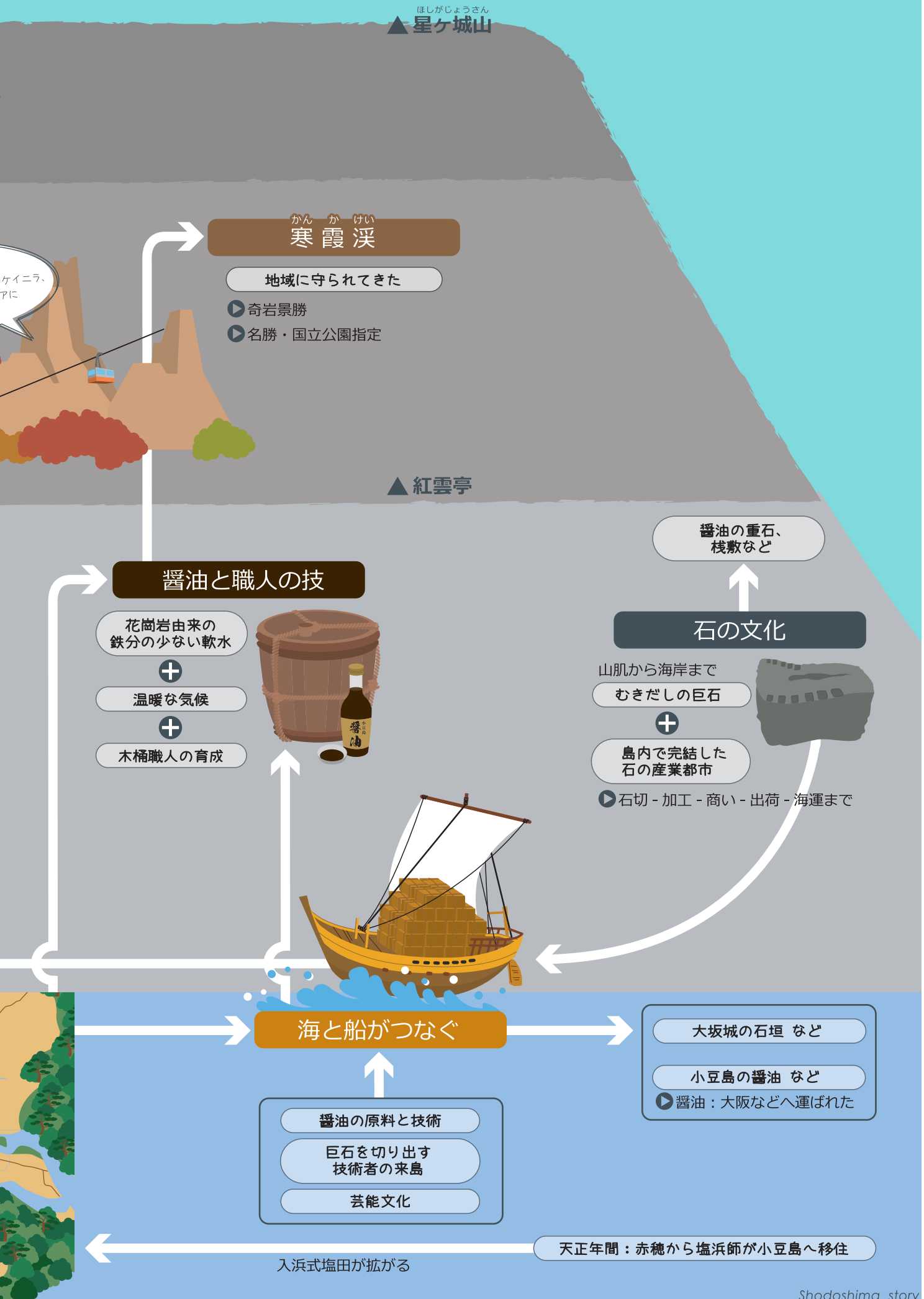
せきこ
潟湖と塩田

- ▶ 花崗岩由来の砂浜
- ▶ 干満差
- ▶ 遠浅

安山岩

火山角礫岩

花崗岩





<四方指>

1. 地質の多様性と3つの土砂災害が 土地利用の多様性をうみだした

備讃瀬戸と播磨灘の間に位置する小豆島は、瀬戸内海で2番目に大きな島で、その形は、西に向いた“牛”や“犬”のように例えられ、島の周辺には大小 20 以上の島が点在しています。

弥生時代から塩が生産され、御名代地や皇室、神社などの塩荘園として発展しました。10 世紀頃から海賊の拠点のひとつであったようで、紀州熊野水軍や伊予村上水軍とも連携がありました。また、瀬戸内海の要衝にあって、漁業、造船、廻船業も盛んでしたが、豊臣家の蔵入地となり、さらに江戸幕府からも加子浦*に指定されました。近世に幕府などの直轄地となったのは、島の水軍を利用するためといわれています。江戸時代以降は、醤油や素麺、石材などが島の経済を支えてきました。また、海上交通の要衝と幕府の直轄地だったこともあり、農村歌舞伎などの文化が花開くなど、多様な地域資源が残っています。

このような小豆島の産業や文化などの発展には、さまざまな地域資源が背景にあります。船で小豆島・土庄港に入港すると、ごま油の香りが鼻をくすぐります。この香りから小豆島を体験する旅が始まります。

寒霞渓（かんかけい） 瀬戸内火山岩類がつくる渓谷美

寒霞渓は、星ヶ城山と四方指の間にある東西 7km、南北 4km におよぶ大渓谷です。多様な奇岩と崖地の絶景が見られ、瀬戸内海も一望できることから、日本三大渓谷美や日本三大奇勝等にも選ばれている一大景勝地です。

寒霞渓にある星ヶ城山（標高 816.7m）は、小豆島の最高峰であり、その山頂から海岸まで約 4.3km しかありません。そのため、小豆島の川は滝のように急流で、土石流などが発生しやすい地形条件です。また、瀬戸内海周辺の基盤は多くが花崗岩ですが、小豆島はその上に瀬戸内火山岩や安山岩があります。

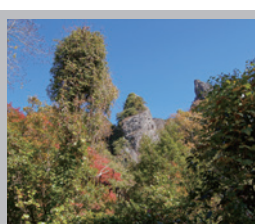
ここでは小豆島の代表的な場所について、地質に注目して生きもののや人の暮らしとのつながりを紹介します。

* 加子浦：公用船や海路を行く参勤交代の諸大名通船に水や薪を供給したり、加子役（船をこく者）を勤める労働役を与えた沿岸の集落



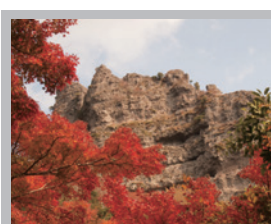
岩が重なったようなマツタケに似た形状をした岩

まつたけいわ
松茸岩
(裏登山道)



渦巻き状の独特な形状をした岩

ほらがいいわ
法螺貝岩
(裏登山道)



雲が層をなしているように見える岩

そうらんだん
層雲壇
(表登山道)

【固有の種いろいろ】 寒霞渓には、世界でも寒霞渓周辺の集塊岩地帯だけにしかいない固有の生きものや希少な生きものが生育・生息しています。

カンカケイニラ



冷涼な気候を好む植物で、氷期には島の低地にも生育していた。間氷期になり、気温が上昇してからは島の冷涼な高地や溪谷だけに残り残されるようにして生き残った種。県条例で指定希少野生生物に指定されている。

ショウドシマレンギョウ



日本列島が大陸と地続きであった頃に、朝鮮半島から対馬を経て分布していた植物が他の地域で絶滅した後も、島の集塊岩地帯に取り残されるように生き残った種。県条例で指定希少野生生物に指定されている。

ヤハタマイマイ



殻長約32mm、殻幅約55mm。世界で小豆島中央部の集塊岩地帯にしか生息しない地表性の大型カタツムリ。地元では、カンカケイマイマイともいわれる。県条例で指定希少野生生物に指定されている。

ミセバヤ



草丈10～60cmの多年草。粉白色した分厚い葉をもつ。10～11月に茎の先端に淡紅の美しい球形の花が咲く。国内の自生地は限定的で、小豆島では複数力所の崖地に点在する。県条例で指定希少野生生物に指定されている。

【大地の成り立ち】

約1,400万年前の激しい瀬戸内火山活動により、小豆島には高い山ができました。当時、この地域は湖で、噴火で出た小石や火山灰が火砕流となって湖底に堆積したものが固まって、厚さ約300mの火山角礫岩になりました。その上に噴火で出た溶岩流が広がり、厚さ約200mの硬い安山岩ができました。その後、大規模に崩れた箇所からしみ出した地下水が乾燥し、石膏やシュウ酸カルシウムが結晶化して穴が大きくなり、大きな地震によってオーバーハングしたところが崩落し、溪谷ができました。

▶ 火山角礫岩も溶岩も同じ安山岩ですが、噴出の仕方が異なります。火山角礫岩は、爆発的な噴火で高温のガスや小石、火山灰など火砕流が海に向かって流れてきたもの、溶岩は、噴火によって地下のマグマが地表に出た粘り気の少ない溶岩流が流れてきたものです。

▶ 星ヶ城山や美しの原の山頂部は、ばんじょうせつり板状節理*が発達した硬い溶岩が崩落せずにテーブル状に残った「メサ」という特長的な地形をしています。

*板状節理：溶岩の上下面にほぼ平行に発達し、溶岩が冷え固まったときにできた板状の規則的な割れ目のこと。

▶ 星ヶ城山から美しの原へ続くメサの南斜面には、溶岩の堆積以前に水中で堆積した火山角礫岩がつくる特長的な崖や奇岩が見られます。

乾燥して栄養が少ない厳しい環境にも、へばりつくように独自に進化した植物が生育しています。

▶ 寒霞渓には「表十二景・裏八景」と称えられる特に秀麗な景観があり、珍しい形をした奇岩もみられます。寒霞渓にある「松茸岩」や「層雲壇」、「法螺貝岩」などの奇岩は、瀬戸内火山活動で形つくられた火山体が地震などを引き金に破壊した後に、風化や浸食・崩壊が繰り返されてつくられたと考えられます。

【寒霞渓にはこんな歴史があった】

神かけの山 元々、寒霞渓は「かきかけやま鉤掛山」や「かみかけやま神懸山」と呼ばれていました。これは、古事記に由来し、応神天皇が岩に鉤をかけて登ったという伝説に基づいているとされています。現在の「寒霞渓」は、明治11年(1878)に香川県出身の儒学者・藤澤南岳によって命名されました。

まもられた地

▶ 明治31年(1898)、地元有志によって「神懸山保勝会」が設立され、遊歩道の整備や寒霞渓の価値を広める活動を始めました。新聞記者や画家を招き、記事や絵をかいてもらうことで、寒霞渓の魅力を広く宣伝しました。

▶ 明治45年(1912)頃には、外国人による採掘や奇樹の伐採などがおこなわれたことがあり

ました。そのとき寒霞渓の景観を守るために尽力したのが、幕末に醤油醸造業を創業し、「小豆島の醤油王」と呼ばれていた長西英三郎でした。長西は、神懸山保勝会に多額の寄付をしたことで神懸山保勝会は土地を買うことができ、貴重な自然や景観が護られたと地元では伝わっています。

▶ このような地元の人々の努力が実り、大正12年(1923)には「神懸山(寒霞渓)」の名で国の名勝に指定され、昭和9年(1934)には、寒霞渓を含む瀬戸内海国立公園が国内初の国立公園のひとつとして指定されました。

遊覧馬の体験観光

寒霞渓の山頂ロープウェイ乗り場の前では平成12年(2000)頃まで、寒霞渓山上を巡る遊覧馬がいました。昔は寒霞渓までは登山するしかなく、裕福な人が山上に登って訪れる移動手段として馬や籠を使っていました。大正天皇も皇太子の時代に馬で寒霞渓を訪れていたようです。麓から山上までのインフラが整備されると、移動のための馬は必要なくなり、山上観光を楽しむ遊覧馬となりました。



＜中山千枚田＞ ©cubic-tt (島空撮)

中山千枚田 地すべり跡地と水

中山千枚田は、小豆島町中山地区に位置する美しい棚田で、平成11年(1999)に農林水産省の「つなぐ棚田遺産」にも選ばれています。湯船の湧水を水源に、標高150～250mの急峻な山腹に約12ha、約800枚の大小さまざまな棚田が波形模様に広がっています。南北朝時代の「湯舟山縁起」に水の記述があることから、南北朝(約700年前)から江戸時代にかけてつくられたものといわれています。

小豆島は雨が少なく、川も短く流れが急なため、水は不足しがちです。しかし中山地区では、湯船山の山腹から1日約400tの豊富な湧水が湧出し、その下に続く千枚田の水源となっています。水があるから棚田ができ、棚田があるから人々が集まる。そのようにして、中山地区には水を中心とした文化が築かれ、今に残されています。棚田の上部にはこの湧水を引き込んだ洗場があり、かつてはここで野菜や食器などを洗っていたとされています。

斜面に築かれた棚田とそれを取り囲むようにある民家と山地、水源地である湯船の湧水、谷底に流れる殿川など、中山千枚田の一带は生業の景観が織り成す日本の農村の原風景が残る場所です。

【大地の成り立ち】

なぜ平地ではなく、
山の斜面に田んぼをつくったのか

中山千枚田は、なぜ農作業のしにくい山の傾斜に田んぼをつくったのでしょうか。また、水不足に悩まされる小豆島かつ山間部に、なぜ田んぼができたのでしょうか。

理由の一つは、中山千枚田は大規模地すべりの跡地を利用した棚田であることです。そのようすは、千枚田が広がる緩斜面の上部に岩盤が崩壊したと思われる崖があり、棚田の石垣をみると、地すべりで発生した大きな岩塊が利用されています。

もう一つの理由は、水を張ることができる土壌だったことです。この場所の地質は火山角礫岩で、母材は安山岩です。安山岩は、風化しやすい鉱物からできており、風化すると全て粘土になります。粘土は粒子が細かく保水性が高い土質となるため、田んぼをつくることのできたのです。

しかし、本来、硬い安山岩や火山角礫岩は地すべりにくい地質なのですが、なぜここでは

起きたのでしょうか。それは、安山岩や火山角礫岩の下に柔らかい地層「土庄層群」があり、この地層が原因となって、その上にある安山岩や火山角礫岩とともに大規模な「キャップブロック地すべり」*が発生したものです。土庄層群があるのは小豆島と豊島のみで、どちらも地すべり跡地に棚田が広がっていることが特長です。さまざまな地質的要因が重なったことと、地すべり後を利用しようと考えた先人たちの知恵により中山千枚田はできたのです。

しかし、近年の少子高齢化や担い手不足、急斜面で狭い田んぼには農機が入るのが難しいため、今でも手作業が多く、また石垣や水の管理など維持も大変です。地形地質と山間部ならではの寒暖差、湯船山の豊富な水、農家の苦労のおかげで美味しい棚田米がつくられています。

同じ田んぼでも平地に広がる、肥土山地区の田んぼは、地すべりで運ばれた土砂によって川がせき止められた湖跡につくられたものです。

*キャップブロック地すべり：キャップブロック構造とは、相対的に柔らかく変形しやすい地層の上に、硬く重い地層が重なっている状態。上部の重い地層が下部の柔らかい地層に圧力をかけて起こる地すべりをキャップブロック地すべりという。



＜湯船の湧水と熊野権現社＞
写真提供：小豆島町教育委員会



＜共同洗場のようす(内部)＞



＜田植えのようす＞
写真提供：小豆島町教育委員会



＜肥土山地区を展望＞写真：小豆島観光協会サイト

〔中山地区・肥土山地区〕

地区に残る歴史と風習

虫送り 肥土山地区は、殿川の下流に位置する田んぼが広がる場所です。虫送りは、約300年前から伝わる中山地区と肥土山地区の伝統行事で、半夏生（夏至から11日目）の頃に火手と呼ばれる竹の松明を田んぼにかざし、「とーもせ、灯せ。」の声をかけながら畦道を歩、害虫を退治して豊作を願うものです。中山地区では一時期、途絶えていましたが、映画「八日目の蟬」で重要なシーンとして「虫送り」が行われたことをきっかけに復活しました。

一方、肥土山地区の虫送りは、江戸時代にイナゴの大発生で飢饉が起こったことをきっかけに始まりました。

薄暗い中、列をなした火手の光がゆらゆらと揺らめく風景はとても幻想的です。

農村歌舞伎 小豆島町中山地区と土庄町肥土山地区に残る地芝居です。農村歌舞伎の起源は今から約300年前（江戸時代中期）、醤油の運搬やお伊勢参り、荒天で船が出ず、大阪で船待ちしていた島民たちが上方歌舞伎の華やかな世界に触れ、歌舞伎の名場面を描いた絵馬や衣裳を島に持ち帰り、神社に奉納したとされています。歌舞伎の人気は島中に広がり、上方から旅回りの一座や振り付け師を招いていましたが、次第に島民が自ら演じるようになったとされています。最盛期には島内に30カ所以上の常設舞台がありましたが、現存するのは、中山地区と肥土山地区のみです。

中山地区の舞台は、昭和62年（1987）3月に、肥土山地区の舞台は昭和50年（1975）9月に国の重要有形民俗文化財に指定されました。また、肥土山地区の農村歌舞伎と合わせて「小豆島農村歌舞伎」として令和6年（2024）3月21日に国の重要無形民俗文化財に指定されました。中山地区では春日神社境内、肥土山地区では肥土山

離宮八幡神社境内の舞台で、それぞれ五穀豊穰等を祈り、地域住民による奉納上演が続けられています。



＜中山地区の虫送り＞写真提供：小豆島町教育委員会



＜肥土山地区の農村歌舞伎＞写真提供：土庄町

▶ 庄屋が私財を投じてつくった池：蛙子池

蛙子池は、土庄町肥土山にある貯水容量63万4000m³の小豆島最大のため池です。この池は、肥土山村（現在の土庄町肥土山）の庄屋である太田伊左衛門典徳が、地域の水不足を解消するために私財を投じて建設しました。雨が少なく地形が急峻な小豆島では、降った雨が地面にしみ渡らずに一気に海まで流れ出てしまうため、川には常に水が少なく、島民は常に干ばつ・水不足に悩まされていました。

伊左衛門は、伝法川を締め切り、大池を築くためのよい場所を銚子溪の奥に見つけ出しました。ここには、当時、自然の水溜りがあり、常に数千匹の蛙が棲みついていたことから「蛙子」と呼ばれていました。それが現在の蛙子池となりました。貞享3年（1686）春、池は完成し、6月15日には待望の池水が肥土山の離宮八幡まで達しました。それに歓喜した百姓達が神社の境内に仮小屋を建てて芝居を催し、池の完成を祝いました。これが現在まで続く「肥土山農村歌舞伎」の始まりであるといわれています。



現在の小豆島オリーブ
公園の周辺

<1976(昭和51)年の台風17号による土石流災害>

出典：小豆島町、2014、小豆島 災害の記憶、株式会社ぎょうせい、p.15 に一部加筆

小豆島オリーブ公園 土石流の跡地を活かす



<水木の荒神社>



<オリーブ>

【大地の成り立ち】

厳しい大地とオリーブと共に生きる

公園内の土を見てみると、白い「花崗岩」と黒っぽい「安山岩」の2種類がみられますが、多くは白い花崗岩です。花崗岩はこの土地の土台をつくっている地質で、風化するとマサ土になり、一方の安山岩は山の上に分布する地質です。ではなぜ、ここには2種類の土壌があるのでしょうか。

実は、小豆島オリーブ公園は、かつて土石流が発生した跡地・扇状地にあります。そのため、公園内では上流部から運ばれた安山岩も含む2種類の土壌がみられます。直近では昭和51年(1976)9月の台風17号により、谷沿いに大量の土石流が発生し、下流域に未曾有の被害ができました。実際にここは土砂災害警戒区域に指定されており、ときとしてこうした厳しい状況を生じさせる可能性のある場所だとわかります。

その一方で、自然災害とうまくつき合っていくことさえできれば、その場所の強みを活かした土地利用をすることができます。花崗岩由来のマサ土は、栄養のある土壌ではありませんが、礫質で水はけが良い特長を持っています。その性質が、栽培適地をみつけるのが難しいオリ

ブの栽培にうまく適合しました。土砂が溜まったところにオリーブを植えてみたところ、うまく生育することがわかったのです。その結果、オリーブ栽培を活かした本公園を開設することができ、多様な施設をあわせもつ観光拠点に発展させることにつながりました。

今後も50年に1回程度の割合で土石流の発生による激甚災害が起こる可能性はあります。しかし、事前にその心づもりでいれば、被害を最小にすることはできます。厳しい土地と共に生きる。小豆島オリーブ公園では、産業・観光・防災の3つを体感できる場所でもあります。

もう一つ注目してほしいのが、公園北側に隣接する「水木の荒神社」です。この神社には、クスノキの大木やウバメガシなど立派な社寺林が残されています。オリーブが生育する土石流の跡地と隣接しているにもかかわらず、水木の荒神社には土石流がこなかったことを示しています。わずかな地形や立地条件の違いで自然災害による影響が異なること、先人がこの場所の特性を理解し神社を建てたことを知ることができます。



＜木桶の製造技術の継承＞写真提供：(株)ヤマロク

2. 小豆島のおいしい食

【醤油】

小豆島の強み 小豆島の醤油づくりは、元禄期（1688～1703年）頃に上方地域で醤油が消費され始めた頃に、醤油の原料である塩を回漕した船頭らによって学びとられたとされています。その後は、経済的に豊かな農家によって自家醸造されていたようです。そして、小豆島の醤油づくりが発展したのには一大産地になる強みがありました。

まずは小豆島の気候です。瀬戸内海沿岸地域は、夏と冬ともに季節風が中国・四国山地で雪や雨を降らせた後の乾いた空気が流れこむことで、降雨量が少なく好天の日が多い「瀬戸内海式気候」です。また、水深が浅く、遠浅の海を活かし、現在の小豆島町草壁地区や安田地区、苗羽地区、馬木地区の浜には塩田が広がり、塩

づくりが盛んに行われていました。また、この気候は「醤油の発酵」にも適していたのです。そして、発酵食品である醤油の製造に欠かせない「良い水」がありました。小豆島を含む瀬戸内海周辺には、二酸化ケイ素成分の多い「花崗岩」や「流紋岩」が広く分布しています。これらの岩石には、麹菌が嫌う鉄分がほとんど含まれていません。一方で、カリウムなど酵母の栄養となる成分は多く含まれています。このような花崗岩に由来する水を使うと麹や酵母の働きが良くなるために、優れた醤油を生み出すことができるのです。

さらに、原料が手に入りやすかったことも大きな理由でした。醤油の原料は主に大豆、塩、小麦ですが、そのうち塩は島内で生産し、大豆と小麦は船の往来があった九州や備前、讃岐か

ら手に入れることができました。当時の小豆島を含む瀬戸内海では海上交通が発達しており、原料の調達や製品の出荷に有利でした。

小豆島の醤油は、現在、国内でも希少となった巨大な木桶による醸造が特長で、木桶に住み着いた微生物によって、各蔵元特有の醤油ができあがります。今もなお、大きな木桶を使った伝統的な製法の醤油づくりが続いています。



＜今坂池から醤油の郷の眺望＞写真提供：小豆島町教育委員会

▶ 塩づくり

小豆島の塩づくりは、弥生時代から始まりましたが、飛躍的に発展したのは、16世紀に赤穂から伝わった製塩技術がきっかけでした。天正年間（1573～1592年）頃、赤穂から小豆島に移住してきた塩浜師によって伝えられた、潮の干満差と遠浅の浜を利用した入浜式塩田です。この技術によって、製塩業は大きく発展しました。江戸後期になると、瀬戸内海各地で塩の生産が増えて余るようになり、また製塩に使う燃料木に限りがあったため、塩を主原料として活かせる醤油業などへ転換が進みました。その後、次第に製塩業は衰退し始め、昭和40年（1965～）頃には製塩風景が見られなくなりました。



＜塩田絵額（真光寺）＞
写真提供：小豆島町教育委員会



＜醤油醸造関係建造物群（馬木・建造物群）＞写真提供：小豆島町教育委員会

【手延べ素麺】

【醤油（ひしお）の郷】 小豆島町安田地区から坂手港へ向かう県道沿いは、「醬の郷」と呼ばれています。ここには醤油や佃煮工場が集中し、今でも明治時代に建てられた一部の醤油工場や蔵が使用されており、産業の歴史景観を体感することができます。

この一帯を歩いていると、醤油づくりのよい香りとともに、どの建物も外壁や屋根が黒いことに気づきます。これは、工場から飛散する麹菌や発酵中に発生したアルコールが建物外に漏れ出し、アルコールを好む黒カビが壁や屋根に付着し、黒く染まるためとのこと。醤油づくりが盛んな地域特有の黒壁が、往時の風情と現代に続く伝統を感じさせてくれる場所です。



＜素麺の天日干しのようす＞

小豆島の名産品のひとつが「手延べ素麺」です。小豆島における素麺づくりのきっかけは、約400年前（1598年）に池田村の村民がお伊勢参りの道中に奈良の三輪で素麺づくりを学び、島に持ち帰ったこととされています。

その頃小豆島では、裏作で小麦をつくっていました。それ以外にも塩や湧水、胡麻の栽培など、素麺づくりに必要な材料を島内で揃えることができました。そして、冬の寒風と雨が少なく瀬戸内海式気候が、天日干しを行う素麺づくりには最適な環境だったのです。

このように生産条件が揃っていたことで、素麺づくりは冬の農閑期に多くの島民によって行われるようになりました。当時の名残りとして、殿川流域では今でも田んぼ近くの小水路などに水車の跡が見られますが、この水車は素麺づくりのときに石臼で小麦を製粉する際の動力として利用されていたものでもあるようです。

また、現在まで続く小豆島の素麺づくりのなかで、麺を伸ばす過程でごま油を使用するのが小豆島素麺の特長です。島外から船で来るときに小豆島が近づくとごま油の香りがする理由は、名産である素麺づくりに一因があるようです。

【オリーブ】

オリーブの一大産地となった小豆島では、オリーブを用いた加工品が多く開発され新しい料理も展開されています。

▶ オリーブを使った調味料：エキストラヴァージンオリーブオイル、瀬戸内檸檬オリーブオイル、バジルソースなど

▶ オリーブを使った料理：手延べパスタ、ひしお丼、新漬けオリーブの天ぷら など

【佃煮】

小豆島の佃煮は、400年以上の醤油づくりと60年以上の佃煮づくりの伝統が息づく特産品です。その起源は、太平洋戦争後に原料の入手難とアミノ酸醤油が奨励され、天然醸造の醤油が危機にたたされたことをきっかけにイモのつるを醤油で煮込んでつくった佃煮が始まりとされています。

現在、島で数百以上もあるとされる佃煮素材の中でも、本場の本物認定品は、30年以上にわたって使われ続けている昆布、のり、わかめ、しいたけ、おじゃこちりめん、きやらぶきの6品目だけに厳選されています。

▶ 瀬と瀬戸のいいところ

小豆島は、瀬戸内海のなかでも島が多く潮の流れが速い「瀬戸」と、海の範囲が広く潮の流れが穏やかな「瀬」のちょうど境界に位置します。瀬戸と瀬では、潮流の違いから生息する魚介類も異なります。そのため小豆島は食材に恵まれており、マダイなど「瀬戸」の海の幸もアナゴやハモなど「瀬」の海の幸も、どちらも楽しむことができる魅力的な島です。



<皇路山>



<エンジェルロード>



<碁石山上からの眺望> 写真提供：小豆島町教育委員会



<菰田八幡神社例大祭 太鼓台奉納> 写真提供：小豆島町教育委員会

3. もっと伝えたい、島の魅力

【歴史・文化】

岩谷地区の大坂城石垣石丁場跡 小豆島は、上質な花崗岩の産地で、岩谷地区の「大坂城石垣石丁場跡」は、大坂城再建のために黒田藩が開いた丁場です。今は400年の石切りの歴史を伝える丁場跡として国史跡に指定されています。

重機もない江戸時代に巨大な石を遠隔地に運搬できたのは、平地が少なく、花崗岩がむき出しになった山肌から海岸までの距離が短かったこと、そして、海上交通の大動脈だった海があったから。石目を読む石工の石切りや加工技術、商い、地形を活かしてつくられた産業港からの出荷、海運までが島内で完結したことで石材産業が発展しました。

石の表面には、石を割るときに使った^{くさび}楔の跡(矢穴)や、黒田藩の丁場の石を示す○や□の刻印が残されており、大坂城石垣に行くと、同じ刻印の石を見つけることができます。当時切り出した石が残る丁場跡は多くありません。黒田藩は、石を他に流用されないよう、見張り番・石守をつけていたため、現在も当時切り出した石が残っています。土庄町^{おみ}小海にはこのような石文化を伝える大坂城残石記念公園があります。切り出されたものの使われることなく放置された石(通称「残念石」)が置かれており、施設



<石に残る楔の跡(矢穴)>

内では昔の道具や土庄層群の化石などを見ることができます。

小豆島秋まつり 秋の豊作に感謝する小豆島最大の祭。1~2tもある「太鼓台」と呼ばれる大きな^{だし}山車を100人ほどの「かき手」で担ぎ、横倒しにしたり、回ったりと勇壮です。

特に太鼓台を手こぎの和舟で宮入させる神事「オシコミ」や高さ約18m、長さ約88mある自然地形に沿うように6~7段重ねられた石垣・池田の棧敷は特長的です。毎年決まった日に各地で行われる秋祭は、その地区ごとに運営や太鼓台の担ぎ方が変わり、今でも島の一大伝統行事でもあります。

【まだまだある地形の不思議】

三都半島 皇子神社社叢の南西の崖で、黒っぽいマントル直結安山岩(サヌキトイド)が白っぽい花崗岩にろうと状に入り込んでいるのが見られます。ここは、日本海誕生のときに熱いプレートが熱いマントルに沈み込んだことで溶けて、そのときに水を多く含んだマグマとマントルが反応して安山岩がつくられました。その後、1,400年前の瀬戸内火山活動のときにマントルから直に安山岩が噴出したのがこの場所です。1億年前の大陸時代の花崗岩、日本が誕生してからの安山岩と日本列島の誕生が見られる穴場スポットです。瀬戸内海ではあまり見られない、安山岩由来の黒い砂浜も注目です。

また、近くの皇子神社社叢は、国の天然記念物に指定されており、イブキやチョウジガマズ

ミなど珍しい植物の自生地になっています。

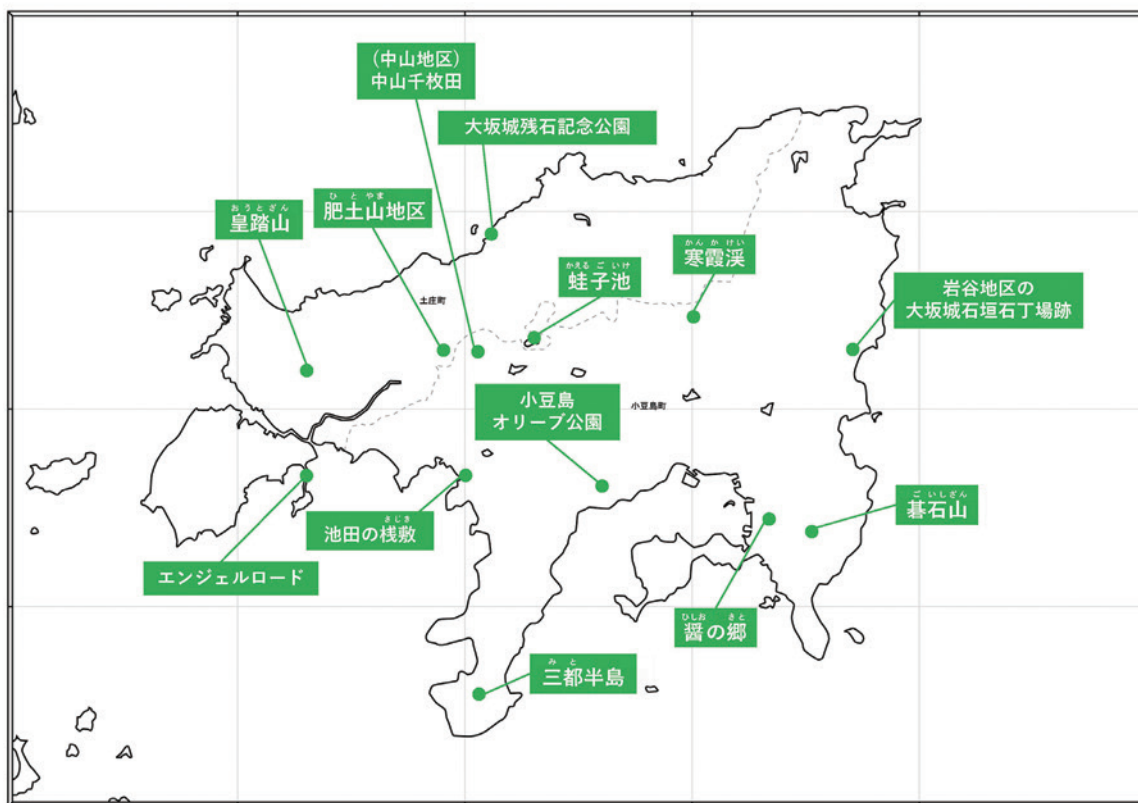
エンジェルロード 前島・中余島・大余島の3島が、干潮時に干上がった海底でつながる「陸繋砂州」の約500mの砂の道です。小豆島周辺は満潮時と干潮時の潮位差が最大約2mと比較的に大きいことも、エンジェルロードがつくられる要因でもあります。

つながった砂道の東西をみると、砂と小石などの礫と質が異なります。東は、伝法川から流れてきた砂が潮流によってたまったもの、西の礫は島から流れてきたものです。東西からの潮流によって、いろいろなものが流れ着くことがあるため、昔は浄土ヶ浜とも呼ばれていました。

【入り込んで楽しむ】

皇路山(おうとざん) 瀬戸内海を望む標高394mの低山ですが、瀬戸内海や近隣の島々なども見え、島ならではの眺望を楽しめます。ハイキングコース内に寺院や山岳霊場などもあり、お遍路気分を感じながら歩くこともできます。

碁石山(ごいしざん) 小豆島八十八箇所霊場第二番札所・碁石山。切り立った地形と白い凝灰岩に黒い溶岩が散りばめられたような岩肌が特長で、昔はここから寒霞溪まで尾根伝いの道があり、小豆島一帯が修験の場だったようです。境内には、かつて修行地だった痕跡や神仏習合時代の鳥居など、歴史を感じさせる遺物がそこかしこにあり、小豆島霊場の歴史の深さを感じることができる山岳霊場です。



【参考文献】

- 小豆島町，令和4年12月認定，小豆島町文化財保存活用地域計画
- 小豆島町，2014，小豆島 災害の記憶，株式会社ぎょうせい
- NPO 法人みんなでつくる自然史博物館香川，香川の自然ガイドマップ2（第二版）
- 寒霞溪の自然と生物多様性，香川県
- 小豆島町／観光サイト <https://www.town.shodoshima.lg.jp/kanko/index.html>
- 土庄町／観光サイト <https://www.town.tonosho.kagawa.jp/kanko/index.html>
- 寒霞溪ロープウェイホームページ <https://www.kankakei.co.jp/>
（ウェブサイトの参照日：2025/3/25）

【表紙写真】

1. 寒霞溪
2. 木桶を用いた伝統的な醤油醸造（写真提供：（株）ヤマヒサ）
3. 小豆島オリーブ公園
4. 中山千枚田
5. 小豆島八十八箇所霊場第十八番札所・石門洞（寒霞溪）
6. 大坂城残石公園

Recommend



▶ マメイチ

小豆島をサイクリングで一周（約 82.4 km）するイベント「マメイチ」。小豆島は細かいアップダウンを繰り返す、一周の登り高さは1,000mを超えるかなりハードなルートですが、海など景色を眺めながら走行できることもあり、近年はサイクリストに人気の島となっています。また、旧草壁港から寒霞溪山頂駅まで約 15 km、標高差 612mをはじめ、麓から寒霞溪まで計 4 コースあるヒルクライムも人気です。

発行日 2025年3月

発行元 環境省 中国四国地方環境事務所

編集作成 株式会社地域環境計画

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。